

羽のあるもの

岐阜北高校 3年 三浦 育真

目を覚ますと、部屋に西日が差し込んでいた。凝り固まった体をほぐすように、ゆっくりと体を起こす。また、こんな時間まで眠ってしまった。溜め息をついて、頭を抱えた。

日曜日だが、家には誰もいない。一人っ子だし、両親は今日も仕事で、朝早くに食事を用意して家を出る。幼い頃は寂しかったけれど、今では感謝すらしている。こんな生活を見られたら、何と言われるか分からない。

とりあえず、昼食を処理しなければならない。帰ってきた親に怪しまれないように。こういうことは何度もあったから、何をすべきかはもう明確に分かっている。

リビングに向かおうとした時に、学習机に伏せてある空のコップを見つけた。ついでに持つて行こうと手を伸ばすと、ガラスの内側で黒い点が動いた。

目を近づけると、それは3ミリにも満たない、小さな羽虫だった。硬いガラスの壁に阻まれて、外に出られなくなっている。

昨夜のことを思い出す。疲れて体が重くなっていたのに、なぜか眠る気になれず、机に突っ伏していた。無気力な心とは裏腹に目だけが冴えていて、まとわりつくように飛んでいた羽虫が酷く鬱陶しかった。しかし、叩き殺す気力はなかった。仕方なく、机の上に止まったところでガラスコップを使い、生け捕りにした。突っ伏した体勢で、何かをやり過ぎそうとするように、内側で無謀な抵抗を試みる羽虫をじっと眺めていた。

今、羽虫は自分の境遇を理解しているのか、微動だにしない。羽すら揺れていない。まるで死骸のようだ。不安になり、コップを軽く叩く。壁にへばりついていた羽虫はあっけなく落ちると、仕方なさげに前足を震わせた。

生きていたのはいいが、このまま放っておくわけにもいかない。昨夜みたくまとわりつかれても面倒なので、外に放すことにする。コップを数ミリだけ浮かせて、近くに置いてあった葉書

を間に差し、蓋をした。部屋の窓を開き、ベランダに出た。

夕方まで眠ってしまう生活が、もう長いこと続いていた。三ヶ月くらい前、つまり高二になつてすぐの頃から、ずっとこうだ。原因は分からない。

ただ、日常に無理を感じ始めたのはこの頃だ。クラスには馴染んでいるものの、周囲に合わせる事が、急に気持ち悪く感じるようになった。誰かが冗談を言つても、本心から笑うことができなかった。友人と騒ぎあつていても、冷めた目で見てしまうようになった。顔に出さないようにしているから、多分まだ誰も気づいていない。けれど、どうしても偽物の笑顔はぎこちない。

一昨日「お前、最近大丈夫かよ」とクラスメイトの中村に言われた。俺は「ああ、うん」と微妙な返事しかできなかった。言葉に詰まったわけは、咄嗟のことだったから、だけじゃない。

一列に掛けられている洗濯物を掻き分けて、ベランダに立つ。手元のコップに封じられた虫は動かない。抵抗のそぶりも見せず、次に起こることをただ待っている。

俺は葉書の蓋を開き、外に逃がそうとした。だが、虫は微動だにしなかった。気づいていないことはないだろうのに、虫は逃げようともしない。何故か苛立つて、俺はコップを激しく振った。すると虫は面倒そうに飛んだ。それはふらついているようにも見えた。

隣の家の軒先に、蜘蛛が巣を張っているのが見えた。この虫も、そう遠くないうちに捕まるのだろうか。自由を得たところで、いい場所に出られるとは限らないのだから。

そう思った時だった。羽虫は目覚めたように安定した飛び方になり、近くの電柱の脇の蚊柱に向かつていった。数百匹はいるだろうか、おびただしい数の虫に紛れて、見分けがつかなくなつた。

ベランダにはたくさんさんの音が飛び込んでくる。車のエンジン音、犬が吠える声、小さな子供らが走り回る声。何もかもがひどく眩しいものと思えた。自分だけが置き去りにされていて、他の人との間には深い溝ができているのだと思つた。

冷たい風が吹いた。日中は暑いのに、夕方になると途端に冷え込む。冬がすぐそばまで近づいているのだ。

部屋に戻り、窓を閉じた。クレセント錠を掛けて、カーテンも閉じる。部屋の明かりを全て消し、体を布団の中へと隠すように潜り込んだ。

俺は眠りたかった。しかしあれだけ眠った後だ。身体に疲れはなく、目も冴えている。

まぶたをぎゅつと閉じた。外の世界を全てシャットアウトしたかった。蛹のようにからだをまとめるため、このままずっとこのままにいたいかった。